

[108/109] 語文研究表紙奥付等

<https://hdl.handle.net/2324/19774>

出版情報：語文研究. 108/109, 2010-06-02. 九州大学国語国文学会
バージョン：
権利関係：



《會員著書紹介》

金原 理 著

『日本の古典と漢文学』

——和歌と漢文学・類書・太宰府と道真他——

本書は、著者が講座や雑誌等に既発表の論文八本に改稿・加筆を施し、これに書評一篇を加え、次のような構成で再編したものである。

I

王朝和歌と漢文学

『田氏家集』と「類書」

筑紫の道真

都府楼の瓦色

隠棲の詩人——兼明親王——

II

日本文人の西湖——林逋への憧憬——

蓮花寺池と西湖——石野雲嶺の風景——

ハーンの「鯨人の感謝」の背景をめぐって

III

書評

古田島洋介注釈『鵜外歴史文學集』第十二・十三卷

「漢詩（上・下）」（岩波書店、二〇〇〇～〇一年）

あとがき

Iでは、書名の通り、まず、和歌の部立や表現と漢詩との密接な係わりと、素材の扱いや発想における両者の径庭について考証し、更に、「類書」を通じて中国古典籍の表現を享受し、自らの作品の措辞の中に定着させていく平安朝期の文人の詩作方法について言及した上で、菅原道真および太宰府での漢詩文化の広がり、そして隠棲の詩人、兼明親王の文学活動にまで目を向ける。

こうした漢文学の世界は近年に至るまで断絶することなく、日本の文学のみならず文化全般に少なからず影響を与え、受け継がれた。IIでは、杭州市にある西湖を切り口として、そこから拡がる漢文学の世界と、時代を越えてもなお西湖に魅了される日本の文化人たちの姿を描く。また、『博物志』や『蒙求』等に記される〈鯨人〉説話が、近世期の歌学書や嚟本へ、更にはラフカディオ・ハーンや谷崎潤一郎へと、様々に姿を変えて伝承されて来た経緯について詳述している。

加えて、IIIに、森鷗外の漢詩を注釈した『鵜外歴史文學集』第十二・十三巻の書評を収録する。漢詩文というと、とかく中古或いは近世期の漢詩人たちを想起しがちであるが、夏目漱石の「木屑録」のように、近代文学の場においても漢詩文の影響は色濃く、鷗外の作品理解に対してもなお一層の漢詩文に対する能力が求められることを著者は指摘している。

（平成二十一年五月 熊本出版文化会館 A6判 一九一頁 一、五〇〇円）

田坂憲二 著

『源氏物語享受史論考』

本書は、昭和五十六年から平成二十年までの約三十年の間に発表された、『源氏物語』の文献学・享受史に関連する論考の中から二十二編を選び出し、纏めたものである。本書の中心に据えられているのは、第二章から第五章に収載された、河内方注釈に関する論考である。

序章 本書の構成と研究史概観

第一章 『源氏釈』

第二章 河内学派の研究

第三章 『水原抄』

第四章 『紫明抄』

第五章 『原中最秘抄』

第六章 梗概本・抜書本

第七章 本文の伝来と表現

初出一覧

索引

あとがき

第一章には、『源氏物語』最初の注釈書とされる『源氏釈』、第二章から第五章には、『水原抄』『紫明抄』『原中最秘抄』

を中心とした河内方の注釈、第六章には、『源氏大鏡』を中心とした梗概書や源氏歌集の展開、第七章には、大島本を中心とした『源氏物語』本文の伝来について、それぞれ収載する。「初出一覧」では、本書未収録となった、十七の関連論文についても紹介する。『源氏物語』享受の歴史を学ぶのにも、『源氏物語』注釈の研究史を学ぶのにも、本書は必読の一冊と言えよう。

(平成二十一年十月 風間書房 A5判 五九七頁 一四、〇〇〇円)

工藤重矩 著

『源氏物語の婚姻と和歌解釈』

本書は平安時代の婚姻制度、『源氏物語』の和歌解釈、紫式部集の解釈について論じられたものである。目次は以下の通りである。

I 平安朝文学と婚姻制度

第一章 源氏物語の「幸ひ」「幸ひ人」をめぐる——幸

運を世間にうらやまれた女性たち——

第二章 紫の上に対する呼称——「対の上」の用法

第三章 髭黒大将の離婚と再婚——式部卿宮娘と玉鬘——

第四章 平安朝貴族の結婚と源氏物語——物語と歴史の間——

第五章 平安時代の倫理・道徳と源氏物語——再婚をめぐる

て——

第六章 師輔集の中の婚姻——内親王との交渉をめぐる

て——

第七章 蜻蛉日記「さひはひある人のためには」の解釈

——道綱母における幸運と不運の意識——

第八章 蜻蛉日記天禄二年条本文改訂試案——「三夜」

「十夜」の解釈を離れて——

第九章 婚姻制度と文学——その後の研究の現状と問題

点——

II 源氏物語の和歌解釈

第一章 夕顔巻「心あてに」「寄りてこそ」の和歌解釈——

語義と和歌構文——

第二章 夕顔巻「心あてに」の和歌解釈再論——「それ」

が指すもの——

第三章 夕顔巻「花に心をとめぬとぞ見る」の和歌解釈

——打消と完了の「ぬ」——

第四章 紅葉賀巻「袖ぬるる」の和歌解釈——文法と和歌

構文——

第五章 真木柱巻と若菜上巻の「深山木に」の和歌解釈

——比喻をめぐる——

第六章 鈴虫巻「わが宿からの」の和歌解釈——弁解の表

現——

第七章 源氏物語の和歌における「両義的」解釈をめぐる

て

第八章 試みがてら逢ひ見ねば——蜻蛉日記と源氏物語の

引歌一首——

III 紫式部集注解

第一章 宣孝関係とされる歌の再検討

第二章 紫式部集注釈不審の条々

初出一覧

索引

あとがき

「I 平安朝文学と婚姻制度」では、平安時代の婚姻制度における従来の通説であった「二夫多妻制」の立場ではなく、「二夫一妻制」の立場の元で『源氏物語』や『蜻蛉日記』などの文学作品における婚姻について論じられている。

(平成二十一年十月 風間書房 A5版 四一六頁 一二、〇〇〇円)